一般社団法人日本新聞協会会長賞

オリンピックから見る人権問題

鹿児島県　霧島市立霧島中学校　３年
英　みずき（はなぶさ　みずき）

「この銀メダルが，グアテマラの子どもたちに勇気を与え，彼らが銃やナイフを置き，その代わりにトレーニングシューズを手に取ってくれればいい。そうなったら自分は世界一の幸せ者だ。」

二〇十二年，夏。場所はイギリス，ロンドン。世界中を沸かせたオリンピックがありました。日本人選手団は，過去最高のメダル数を獲得し，日本人選手の活躍に日本中が釘付けになりました。しかし，私がこのオリンピックで一番心を動かされたのは，日本人選手の活躍ではなく，この言葉でした。これは競歩二十キロメートル銀メダリスト，エリック・バロンド選手の言葉です。メダル獲得者の誰もが，目標達成の喜びや支えてくれた周囲への感謝を述べているなか，彼だけは，自国の子どもたちの未来への希望を語りました。

グアテマラは中南米にある国です。三十五年以上続いた内戦の影響や政治情勢不安もあり，決して治安が良いとはいえない状況にあります。軽犯罪は日常茶飯事で，犯罪者の九十パーセントが処罰されないと言われるほどです。麻薬密輸組織などが少年の犯罪組織を作り，日常的に子どもたちが銃やナイフを持って犯罪を犯しているのです。

彼の言葉には，強い強い思いが込められているように感じました。それは，母国の子どもたちが置かれている環境を変えたいという強い願いだと思います。

どのような環境にいても努力すれば結果はついてくる。だからグアテマラの子どもたちもスポーツでも，それ以外でも何か目標を持ち，それに向けてあきらめずに努力してほしい。それをエリック選手自身が，このオリンピックで証明したのです。国の情勢を考えると，日本のように，毎日オリンピックに向けて練習に励むことはできなかったことでしょう。毎日を無事に生きることで，精一杯だったかもしれません。その中で目標を高く掲げ，それに向かって努力し続けたからこそ，今回銀メダルを獲得することができたのだと思います。

わたしは日本に住み，何ら不自由なく毎日の生活を送ることができています。しかし，グアテマラのように世界には，私たちが毎日送っている普通の生活が送れない国が存在するのです。私はそのことを深く考えずに生きてきたことが，恥ずかしくなりました。同じ地球に住んでいるからこそ，みんなに平等に人権は与えられている。そう思っていました。しかし，実際は違ったのです。

この広い世界には多種多様な人種，文化，伝統があります。その分，それぞれ

の特徴や違いがあって当然です。しかし，何があっても，人権に違いがあってはならないのです。子どもは生まれてくる場所を選ぶことはできません。それなのに，同じ子どもでも住む国や場所が違うだけで，自由に勉強ができ，好きなものを食べ，やりたいことができる子どもと，そうでない子どもがいる。この事実が，同じように人権の保障がされていないことを物語っています。

その事実を知った上で，私たちに何ができるのでしょうか。中学生の私には，この大きな問題をすぐに解決できるような名案は，思いつくことはできません。しかし，一つだけ分かったことがあります。それは，私たちが恵まれているということです。世界にはグアテマラのように，毎日命を危険にさらされて，自分の意志に従って生きることすらできない人たちがいます。その一方で，私たちのように毎日安心して，何不自由なく生きられる人たちがいます。私たちが送れている自由は，当たり前のことではないということです。このことに気づけたことは，私にとって大きな成長です。

地球上全ての人に，誰にでも等しい人権を与えるということは，今の私にはできません。しかし，多くの人が今の自分の置かれている状況に気づくことが，世界の不平等な人権を変える第一歩になると思うのです。一人一人の力はとても小さいものかもしれませんが，気づいた人から，「同じ地球に住んでいる誰もに，平等な人権を」という意志を持って，日々の生活を送れば，その意志が行動を変え，その行動によって，世界の不平等な人権が良い方向へと変わっていくのではないでしょうか。

エリック・バロンド選手の言葉をきっかけに多くの人々が，この問題に気づくことができたのなら，地球上の誰もが平等な人権を与えられる日が来る日が近いかもしれません。そして，グアテマラの子どもたちが，銃やナイフを置き，トレーニングシューズを手に取る日が必ず来る。そう信じたいです。